

決定

ありがたいの一語

全ての国の言葉から「ありがたい」の一語を取り除き、全ての家庭から「ありがたい」の一語を駆逐し、そして私の今日一日の生活から「ありがたい」と感謝することの全部を取り去った時、そこにはいったい何が残る。

貪、瞋、痴の地上醜の中から「ありがとう」の一語が、ずっと久遠劫来、そうして永劫流れ動く。貪欲と瞋恚と愚痴との地獄業に疲れた者たちは、その底に火山脈のように流れ通る、一脈の光と涙とに蘇る。そうしてその流れが三毒の煩惱の中に噴き出す時、「ありがたい」の一語が、心情から頭から口から飛び出して来る。

自然の大慈大悲を、高慢と貪欲と愚痴と瞋恚とで、固く封じて感じないものには、「ありがたい」の一語が心から口から遠ざかる。

「ありがたい」と言い得ることは、「ありがたい」と言わせることよりも困難なことである。人はもし、あの、さもしい、汚ない、卑しい心に幾分でも破綻はたんが出来た時、内より輝く光に接する。ありがたい歓喜の光。

大地の底には真紅に熔けた、燃えた、熔岩が噴き出よう／＼とたぎっている。

地図を開いて火山脈を見る。日本帝国の精のように東海の天にそびえる富士山、その富士山を中心に南北に走る富士火山脈、北は妙高山にはじまり、八岳、箱根、天城を経て、伊豆七島、硫黄列島に至る大小の火山。姿形はちがっても、大地の底に燃えたつ熔流の噴き出づる所である。

人間、否、一切群生の魂の底の流れ燃ゆる真紅な光の流れが、固く鎖した地殻大地を突破つて熔岩がほとぼしり出るように、罪、迷い、我欲、立腹、嫉妬、鬭争、等々あらゆる地獄業によつて固く固く鎖した「我執」の地殻をやぶつて、燃ゆる光が突き出て来る。

「ありがたい！」の一語。

「ありがたい」の一滴。

「ありがたい！」の合掌。

大地の底からつき出す力。人は皆この力を忘れている。

心情の中からつき出す力。人は皆この力を忘れている。

眼をあげて人の世の相を見る。つき出すこの力を忘れて、死んだ火山のような冷たい生命のつきた人と人を並べて、難しい制度をつくることによつて地上の祝福を得ようとする。

眼を伏せて我が心の内をのぞく。つき出す光を「迷える我執」によつておおい、「ありがたい！」の涙と笑いとを失いつつ、外に外にと、幸福という屍骸をたずねて出でようとする。

けれどもけれども、ありがたい、ありがたい。最大の声をはりあげて、叫び得るありがたいの実感。

強かった、強かった、固まった地殻よりも、つき出る熔岩の力は強かった。

強かった、強かった、罪のためにかたく鎖じた私の胸の鉄壁よりも、つき出す本願力が強かった。

冷たく、固く、久遠劫来、私の胸に張りつめた鉄壁を、見事メリメリメリと打ち破つてほとぼしり出でたる「ありがたい！」の一語。

天地自然のありがたいを感じる心。

親のありがたいを感じる子供。

子のありがたいを感じる親。

夫のありがたいを感じる妻。

妻のありがたいを感じる夫。

兄弟の、隣人の、師の、教え子の、全てもの皆のありがたいを知る心。

その心が、涙にむせぶ限り、言語の中から「ありがたい」の一言葉がなくならない限り、辞書の中に活用される語として載っている限り、私はその底を流れる力を信ずる。誰の口からでも「ありがたい！」とほとぼしる。老少善悪、男女、賢愚、全て誰にでも「ありがたい」と出得る。

どんな場合、どんな人、どんな時にでもいい、「ありがたい」と感ずるその尊い心の奥、奥に奥にと深く入りたい。その底に徹底する時、洞徹したまう光明にふれる。切れ切れに見えていた「ありがたい」をたつた一つに繋ぐ力。

たつた一つから八万四千に別れ出る「ありがたい」。

人様の親切を通して見ゆる大慈大悲の如来の本願力。

親思う心を通して、その奥に見ゆる大悲の親の本願力。

咲き続く紫雲英れんげの花を見ては、ある夕、ことに魂の故郷がしのばれる。

苦しい時にはやはり苦しい。けれどもその苦しきのままの中から、吹き出して来るありがたい心。

魂のどん底からありがたいと吹き出したことのない人よ、「ありがたい」という一語の抹殺せられたあなたの生活に、どこにほんとうの光がある。どこにほんとうの安心がある。

どうしてもどうしても念願する。

たつた一つの一番大きな「ありがたい」を知らせたい。

「ありがたい」と言い得る謙虚な心にならせた。

かくて人の世は「ありがたい」と生き得た部分のみ、ほんとうに生きたのである。末通つた慶喜に人の世を暮し得る者のみ、ほんとうに生きているのである。

最上、最大のよろこびとは何ぞ。過去未来現在三世全体を救われて、如来と共に生きることである。

「となふれば恨みくやみの雲はれて むねには残るしんじんの月」

「忍土ながらここもはちすのうてななり 弥陀たのむ身はねざめうれしき」

「うれしきを昔はそでにつつみけり こよいは身にもあまりぬるかな」

「宿かきぬ人のつらさをなさけにて おぼろ月夜の花の下ふし」

「行きくれて木の下かけをやとせば 花やこよいのあるじならまし」

決定（その一、死）

死は人のまぬがるべからざる運命である。いかに西洋の系統組織の整然たる哲学、科学、倫理、何をもつてするも一步も立ち入ることを許さざる人の運命である。

世の浅薄者流は言う。「人は生れそして死する。死の後に何も無い。この体が元素にかえるのみだ。」一番都合のいい早わかりのする話である。けれどもその浅薄者流の見る人生はあまりに表面的である。深い魂の世界には一步も入ることは出来ぬ。

生きることを知って死ぬることを知らざる者、それは又真に生きることをも知らざる者である。

母の胎内より出でてオギアの声をあげた時、「生きる！」の宣言をする。天上天下唯我独尊の強い宣言。けれどもこの「生きる！」の強い声にはすぐその裏に死ぬるという強い運命が裏づけられてあつた。

ほんとうに生きようとする者は、生に裏づけられたる死の事実を見る。

種々なる説や、色々な学問が、どんどん通つて行く。世界歴史あつて数千年、色々な死の説が、死を言う者を、笑つて通り、馬鹿めて通り、讃めて通り、賛成して通つた。その後一人残つた我々の魂は、深く深く生命の奥にくい入つて、死に対するほんとうの解決を得ようとする。

西暦一千八百二十一年五月五日、彼の歐洲の天地に風をおこし、雲をよび、草木まで靡かせたナポレオンの魂は、セントヘレナから彼の世へ飛んだ。英雄ナポレオンは死を考えなかつたか。

その病の床にまねきしモンテローン將軍に告げて曰く「我は已に我が務を遂げて今死せんとす。大将よ、卿も亦我が如く死せよ。………帝位、富貴、功名に誘惑せられて、静かに人生の帰趣を思ふ能わざりき。されど心裡常に信仰の志あり。………思うに上帝は我が病をいやすを欲したまわざるべし。」と。これを聞いた医者アントマルモーは英雄の胸中にも死に対する考えあるをひそかに冷笑した。ナポレオンは眼を怒らして叱つて曰く。「医者は薬を与えればそれでよい。我は靈魂の不朽を信ず。汝輩の知るところではない。」

世界歴史の上に痛快な数頁を残したナポレオンすら、死を考え、死のかなたの世界に生きようとしたではないか。

更にかえつて我が歴史を見る。日本歴史のあるかぎり忠臣の誉れを永えに残した楠正成公。死の解決はなかつたか。大楠公が討死の覚悟して朝敵足利尊氏と最後の合戦をした湊川の戦。その死する前一日、広嚴寺の明極禪師を訪い、死生問題の根本的解決を求めた。その問答に曰く

「生死交謝時如何」

「両頭俱に裁断すれば 一劍天に倚つて寒し」

「落処作麼生」

禪師威を振うて一喝す。正成公起立して三拝すれば全身に汗が流れる。

もとより禪の言う所、私の解するところにあらざれども、正成公にして死の解決があつた。その自刃する時、七度人間に生れて朝敵を滅すことを誓つた信念は、蓋しその根底を伺うことが出来る。

同じく忠臣として修身教科書にのる平重盛公は如何。

弥陀如来四十八願にかたどりて、四十八体の仏を、その居室に安置し、四十八人の少女に一燈を捧げさせて、「心の闇の深きをば、燈籠の火こそ照すなれ、弥陀の誓いをたのむ身は、照さぬ所はなかりけり。」と歌わしめたという。

徳川家康の念仏の子であつたことは名高いこと。

かの白隠禪師が死の歌を作り大死を訓えたる中に言う。

「若い衆や死ぬがいやなら今死にやれ

一たび死ぬばもう死なぬぞや。

口はきけどひとたび死なぬ侍は

まさかの時に逃げつかくれつ。

臍の底で一たび死んだ男には

真田が鎗もはも立たぬなり。

何事も皆捨て、死んで見よ

閻魔も鬼もぎゃふんとするぞ。」

ああ、死を知らざる者よ。死に徹せざる者よ。死を考えざる者よ。死を怖れざる者よ。何故に大死一番、一度死を考え、死にまどい、死を疑い、死に徹底して、しかる後、大死一番しないのだ。

死を考えざる者、死の刹那に至つて死を怖れ、後悔するも何の益があろう。

決定。決定。死の問題を決定せよ。死の問題に明確なる答のない者に、何で徹底した人生があろうぞ。

大死一番、死の問題を決定せよ。誠に死に当面した時、日頃の大言壮語も役にたたぬ。頭につめこんだ知識も駄目、そもそも死の問題に明かなる解答のないかぎり、今日一日の生活すら、何等の意義がないはずだ。

真実を求める者よ。全ての空想と、理論とを排して、ほんとうに人生そのものを生活せんとする者よ。死はまぬかるべからざる事実である。浮世三分五厘で暮し得る浅薄者流はしばらく捨ておき、真実の一道を求むる者よ、死の事実にも明確なる答を得よ。

決定 その二(宿業)

私たちは単なる運命論者ではない。

けれども人生の根本に頭をくい入れて深い解決を求める者である。

ある者は営々として一生を汗脂にまみれて働くもなお貧困である。それに対して彼には知識が足りない、学問がなかつたから、経済の頭がなかつたからとの答えを得る。一応は都合のいい、理にあつた説明である。

ある者は生れながらにして病弱である。そこに養生が説かれる。一応は養生に意を用い、医薬を信じ、自分の不摂生を改めねばならぬ。

早く親に別れた子供、子供に死なれた親、呪いあつて暮さねばならぬ夫婦、その他、生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦、等にからまり彩られた

地上苦は、經驗論的な物質的な説明で満足するにはあまりに複雑であり、深刻である。

まことに人間苦は、底知れぬ無智と、ほどききることの出来ぬ複雑とを以て魂の周囲を取りまいてゐる。単なる修養を説いて救うにはあまりに悲惨である。浅はかな慰めを語つて諦めさすにはあまりに悲痛である。

人の魂がほんとうに人生のこの深さに徹する時、そこに過去から現在に流れ来つた、たつた一人の、傷ついた私の、いたましい流れを見るであろう。

ここに十個の種子がある。何故に、一個は岩の上に、一個は砂の中に、一個は陰地に、一個は山辺に、一個は水辺に、一個は瘦地に、一個は肥地に、一個は金殿の園に、一個は埴生の小屋の前に、一個は道ばたにおかれたのであろうか。修養が説かれ、諦めが教えられる前に、この事実の証明を与えられねばならない。

私は倫理哲学が言うところの生命の自由、意志の自由の学説に賛成する。けれども私の魂はその自由を根拠にしたところの宿業を必然に信じねばならぬ。譬をとつて言うならば、今彼が、貧乏で子沢山で、その上病気で困つてゐるということは、今出来たことではない。若い間に働かなかつたこと、あるいは働いても贅沢であつたこと、働いても働いても生来貧しくてどうしようもない、金のたまらなかつたことが原因である。

今の貧苦を救うためには、若い間の彼の生活を救わねばならぬ、今の彼は、彼の若かつた時から流れて来た一日一日の生活の連続、即ち、業のあらわれである。私の今日は、一言一行といえども、過去の業を出ることは出来ない。善悪の二つ、みな善業、悪業の然らしめるところである。

然れば何故に十個の種子は、それぞれ賢かつたり、愚かであつたり、強弱、美醜それぞれに根本的の差異をもつて生れ、しかもそれが違つた十種の畑に播かれたか。神がもし造つたものならば神に不平を言わねばならぬ。天の仕業なれば、天を恨まねばならぬ。ここに過去世について教えられねばならぬ。

「お前が岩の上におかれたのは、お前の過去世がそうさせたのだ。

お前が金殿の園に生えたのは、お前の過去世の総勘定がそうなのだ。

お前が他の誰とも同じでなくて、たつた一人の相でいねばならぬことは、お前の過去世が誰とも違つていたからだ。」

我が運命をあやつる神をも認めず、天をも言わず、どこまでも「我」一人の全責任である。

我が責任でありながら、私は私の過去を救うことは出来ぬ。

私の生まれ出た境遇と、私の生れながら持つていた本質的な性格。この身上と性格とは如何ともすることが出来ぬ。その性格と境遇を生み出した過去世の業を如何ともすることは出来ない。私の魂は真に泣きました。魂の底からわなわなと震えました。一語を吐けば蛇のように、一つ思えば悪魔のように、青い焰と紅蓮の烈火、氷のような冷たい青い波のうねり、それが私の心の全体であり、この心が大蛇（気味悪く青光る）のようにのそのそと匍はつてゐるのが私の業でした。

蛇だ。まむしだ。悪魔だ。鬼だ。地獄必定。必墮無間。極重悪人。

如何なる言葉も拒むことの出来ぬ私であります。

悪業に悪縁、それから悪果。悪果は悪業に、悪因に、悪業、悪因、悪縁、悪因、永えに私は悲泣せねばなりません。否、それさえ知らずに永劫迷うところでした。

俄然！ 突然！

燦然としてお光は輝きました。

否、光を見る目は開かれたのであります。

のそのそと匍う気味悪い大蛇は正体を現わしました。大蛇、我が業、ここに私の真の涙があります。

自分の魂の美しい方に何で救いがいりましようぞ。

自分の魂の正体を見とどけない方に何で救済がいろいろぞ。

兄弟よ。

されど兄弟よ！

五濁悪世の泥水吸う者に清らかなる者があり得ようか。

決定して！

決定して！

大蛇は大蛇と決定して。

地獄行きは地獄行きと決定して。

決定 その三（厭離穢土）

この世は穢土だ！

この世は暗黒だ！

この世は苦海だ！

この世は難度海だ！

この世は無常だ！

私は一厘のかけひきもなく、何の誇張もなく、誰が何と言おうと、弱いと見られようと、言いきつてしまいます。はつきり言いきつてしまいます。

穢いから穢土と言います。生きている者は一皮はいだ時、見られた様ではないほど、きたないありさまをしています。孔という孔からきれいなものを出してしましうか。絶世の美人、白粉をはがして下さい。二十四時間中にその手のふれる全てを知って下さい。人間の手は、きれいであるべき食事に使う手と、便所に使う手を別に持ちませぬ。

肉体でもそれです。更にその心に至っては、美しく装った心の箱の蓋をとる時、八万四千の大小の悪魔がひそんでいます。この肉とこの魂とを持った私が、この地上にいる間、地上はけがれた所であります。

さらに死んだ者を見ます。地上は生きたものを除けばすべてが死体であります。骸骨であります。骸骨が、死体が累々として集っています。

もし人の死体を食っていたら、人は色を失うでしょう。魚の死骸、米の死骸、大根の死体、牛の死骸が私の食事ではないか。羊の死骸、綿の死骸、麻の死骸、それが衣服ではないか。樹木の死骸を組み合せて家を造る。

かくて地上は生きた者の間を死鉢と骸骨をもって埋められています。そうして生きたものも間もない内に死体となり骸骨となります。

それは形の上のことです。もし魂について見たならば更におそろしさを増します。

魂の本願を忘れた人間が、ただわけもなく、右に左に忙しそうに動いています。

どこから来て、どこに行くか。何のために生きているか。明確な答は一向出来なだけでただ動いて疲れています。

大地の上に足がつかず、どこからどこへとも知らず、動く本当の目的も知らない者は幽霊であります。自転車に乗った幽霊、大臣とか、博士とか、長者とか、百姓とか、教員とか、色々な幽霊が暗黒の中に動いています。幽霊は骸骨であります。生きていないのであります。何と、動いてはいるが生きていない者の多いことでしょう。幽霊のいるところは暗黒であります。

人生は生れては死に、生れては死ぬる生死の苦海であります。怒涛逆巻く難度海であります。浮きつ沈みつしているだけで、岸の見つかりそうにもない、岸に泳ぎつかれそうにもない、荒海であります。愛欲の広海、生死の苦海、渡りきることの出来ぬ難度海であります。

生れて死せば、泳いで渡ったと思つています。けれどもそれはただ波に流されてまわつていただけであります。

永劫私の魂はこの広海を出ることは出来ませぬ。(世間とか、義理とか、何とか彼とか、そんなことからのがれて、自分をじつと見ての魂のさきやきです)

島も見えぬ、火も見えぬ、救いも見えぬ、ただ山のような大波の中に、命ながらもがいているのが私でした。けれども眼を一寸移すと、難度海の中には無数の私のような人がやつぱり浮きつ沈みつして苦しんでいます。ただ当面に顔にかかる波を払い退けようとして苦しみながら。

しかもなお悲惨の極みは、かくして浮きつ沈みつ苦しみながらも、隣人と隣人が闘っているではありませんか。私もその闘いに加つていました。

親子でも、兄弟でも、夫婦でも、親類でも、近所でも、村、国、全ての社会、国と国、何でも彼でも争つたり戦つたりしないと一日もすまされないのでが難度海であります。

どうしてもこの世界は嫌だ。

厭離穢土、この世界は嫌だ。

嫌で嫌でならないままに、どうしても離れることの出来ないが故に、更に嫌であり、絶望の涙があります。

「急げ人 弥陀のみ船の通ふ世に

乗りおくれなば誰か渡さん」(聖徳太子)

決定 その四(無常)

平気である人には何もない。平気でながめていたら何もない。平気で聞いていた何を聞いてもあたりまえなことばかり。

「今この婆婆世界は耽玩すべきことなし、輪王の位も七宝久しからず。天上の樂も五衰早く来る。乃至有頂も輪廻期なし。況んや余の世人をや。事と願いと違い、樂と苦と俱なり富める者未だ必ずしも寿ながからず、寿ながきもの未だ必ずしも富まらず、あるいは昨は富みて今は貧となり、あるいは朝に生れて暮には死しぬ。故に經には『出づる息は入る息を待たず 入る息は出づる息を待たず。』と。ただ眼前に樂しみ、去りて哀しみ来るのみならず、亦命終る時に臨みて罪に隨いて苦しみに墮つ。」(往生要集)

ああ、不夜城のような電燈のまばゆい都会の表通りを、人は華に浮かれて通る時、町の裏には冷たい墓石、物凄いやみを浴びて青白く光る。

「夫れ、人間の浮生なる相をつらく、觀するに、おほよそ、はかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。……一生すぎやすし。……我やさき人やさき、けふともしらず、あすともしらず、をくれさきだつ人は、もとのしづく、すゑの露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこ、たちまちにとどち、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなく變じて桃李のよそはひをうしなひぬるときは、六親眷族あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず……」(御文章)

平清盛や今いずこ、豊太閤、醍醐の花見に綺羅きららを飾りし人やいずこ、足利義政はいずこに、小野小町の美はいずこに、シーザーもなく、カントも死し、孔明もない。

古今集を繙ひもといて見れば

「ねても見ゆ ねでも見えけり 大かたは空蟬の世ぞ夢にはありける」(紀友則)

「夢とこそ見るべかりけれ 世の中にうつつあるものと思ひける哉」(紀貫之)

「もみじ葉を風にまかせて見るよりも はかなきものは命なりけり」(大江千里)

「露をなど仇なるものと思ひけん わが身も草におかぬばかりを」(藤原惟元)

人の世は、露のしばらく草の葉にとどまるが如く、微かなる風にゆるがば、玉の緒はたえぬものを。

「つひに行く道とはかねて聞きしかど 昨日今日とは思はざりしを」(業平朝臣)

美男子の典型として今も言いはやされる在原業平にして死の將に來らんとするやこの歌を詠む。

風雲に乗じて位人臣の榮を極めた豊臣秀吉すら、死に向つては

「露と起き露と消えぬる人の世や 難波のことは夢の又夢」

と詠じて人生朝露のはかなさを言う。

「今日も人の死ぬる日にて候。」

時計のセコンドの音につれて、世界のどこかに、一人、一人、又一人、刻々に死んで行く。

小河内支部の藤田米代、里子両法姉の御両親は、四月の桜の真盛りに、京都の本願寺に参拝せられた。哀れ御尊母は、出でまして帰ります日はとこしえにないとは知らず、両法姉に送られて御本望を遂げられた。祖師の御尊影のある地とは言え、旅の仮寝の床の内より安養の世界に急がれた。亡き尊母の骸むらお宅に着きたまい、氣も狂乱な

両姉がまだ夢心地にいますその夜、父君には又も重き病の床に就かれて、医者よ薬よと、力つくされし甲斐もなく、亡き妻君の後を追うて、ちょうど初七日の同じ時刻、み仏のみ国に往生されました。

わずか一週間の内に、父と母とを失いたまひし法師の心中を思う時、言葉も、挨拶もたえはてて、出し得るものはただ念仏ばかり……この事実を味わねばならなかつた法師達の前に、この悲痛の事実の前に何をもって行つたとて、何の権威や慰めがあるろう。

死は事実である。万人に絶対平等に与えられる事実である。

かわい子供の消えゆく玉の緒を、我が命に代えても引きとめんとせし親、高等女学校を卒業せし花の蕾の嬢様の死によつて世の中の一変せし親、我が身の死を目前に見て泣く病室の人、日毎／＼に聞く哀しき死によつて生れて出る地上の涙は、何時の世にとて枯れようぞ。

ああ、何ぞ決定せざる、無常の世に。

ああ、何ぞ決定して死を解決せざる。

大死一番、死を往生に更かえることによつてのみ、死の解決がある。

死は輪廻の死で、往生は仏への誕生である。

往生！ 往生！ ここに人間最後の解決がある。

電光朝露の夢まぼろしの世に、無常を感じずして何故に道草を食う。

人の世は誰も皆、一步もとどまることをゆるされず、一息一息が消えてゆく。

百年を経ざるに、我が身も、親も子も兄弟も、隣人も皆、なき数に入るものを。

ああ淋しい。魂の底から淋しい。すべては皆消えてゆく。

我がなき後、名は残るとも、何になる。

我がなき後、富は残るとも、何になる。

我がなき後、世の文明は進むとも、我に何の関係がある。

無常の世に、常住なるもの、未通りたるもの見つかからない間、ああ、何を目的に生きて行く。

人よ、人よ、刻々に消えゆく無常に覚めよ。

無常とは一切万物の死である。

無常を思う時、魂は全てのいい加減な学問や事業や遊戯から覚めて、深く／＼何かを探ろうとする。

無常の世に、あなたの魂は、深く深く何かを探ねようとはしませぬか。

決定

宗教は死の解決であります。死を呑気に見ていられる者に、死を怖れざる者に、信仰の必要はありません。

信仰は罪の救いでありませぬ。特に弥陀宗は、親鸞教は、祈らず、願わず、頼らず、懺悔せぬまを、本願力一つによつて罪のままを抱き取つて仏にしようという宗教です。罪を知らざる方、宿業の恐しさに泣かない方に用事はありませぬ。

この世界がこのままでよい方には宗教の必要はありません。汚れた世界、罪の大地の上、それを私の力でどうすることも出来ないのです、ただあの世の尊さに心ひかれるのです。厭離穢土と欣求浄土とは一枚紙の表と裏で、この世と未来と初めから両手に花の握りたい方には、信仰の門は開かれませぬ。

死をおそれ、宿業に泣き、この世に飽き、無常に魂のおののき震う人。その人のみ信仰の門には入れられません。

救われたい人。

助けてほしい人。

人生の目的のわからぬ人、そうしてその解決のほしい人。

その外の方はもつと行って、人生の本当を見て来ねばなりません。